

伊藤和行先生の思い出

佐野 勝彦*

In Memory of Professor Kazuyuki Ito

Katsuhiko Sano

伊藤先生は私が学部2年生の頃(1997年)より、専門分野こそ違えど、授業や翻訳の仕事などを通して大変丁寧にご指導いただきました。「佐野くん、佐野くん」と8階の現代文化学共同研究室へと雑談に来られた時の伊藤先生の様子を今でも昨日のように思い出します。なかでも2006年12月ごろに研究室へ来られた折に、伊藤先生は「いいことを思いついたんだ、チューリングとフォン・ノイマンの解説をつけた翻訳を出すのはいい企画かもしれない」とお話しくださいました。この「閃き」がいかにより思いつきなのかを説明するために伊藤先生は「研究が進まなくなったときには古典に戻るのがいいんだよ」とおっしゃっていたのを記憶しています。実際、チューリングという「古典」に関わったことで私自身の研究の幅も広がり、現在の勤務先でも関連した授業を開講できているため、伊藤先生の先見の明に現在でも助けられています。

伊藤先生はその後直ちに、閃かれた企画を当時共立出版におられた小山透編集部長にお話しし、小山さんから前向きなご返答をいただいたことで、企画が動き出しました。私とは分野の異なる、伊藤先生や杉本舞さんと一緒に、翻訳の仕事をする機会を持たしたのは私にとって幸運なことでした。伊藤先生は、私のチューリングの『計算可能な数について』の翻訳のドラフトに蛍光ペン(緑色)と赤いボールペンで細かく書き込みを入れて(図1参照)、表記揺れや漢字を開いて書くか、など細かいコメントをくださいました。伊藤先生は、段階を踏んで粘り強く、翻訳や解説の内容をチェックする機会を設けてくださり、編集の仕事をどのようにすべきなのかを身をもって教えてくださいました。最終的にこの仕事は、伊藤・佐野・杉本(2014)として、小山さんが移られた近代科学社から出版されることになりました。

2009年8月に私が博士論文を提出したときは、指導教員だった内井惣七先生が退職された後だったので、専門外の伊藤先生が私の博士論文の主査を務めてくださいました。試問の折に、伊藤先生が、様相論理学についての私の博士論文のほぼ全てのペー

* 北海道大学大学院文学研究院 哲学倫理学研究室 v-sano@let.hokudai.ac.jp

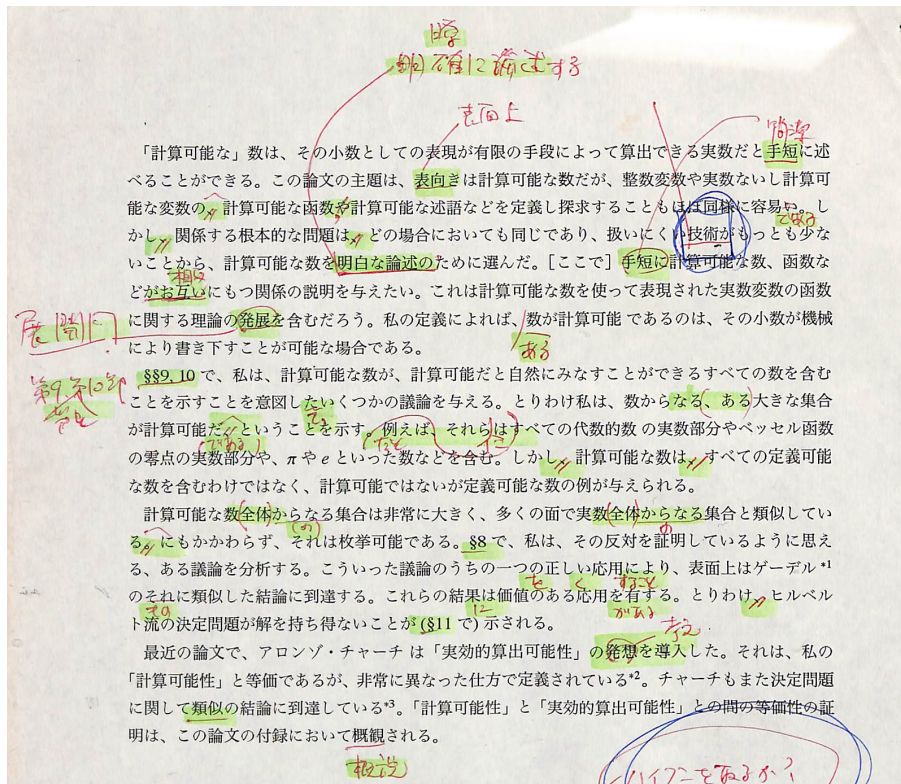


図1 チューリング『計算可能な数について』の私の翻訳への伊藤先生の書き込み

ジを、蛍光ペンと赤いボールペン、さらには付箋を使って、細かく目を通されていたのには驚くと同時に伊藤先生の科学史家としての知的誠実さを感じました。その後、私が学術振興会特別研究員 (PD) として在籍していた、情報史料学研究室の林晋先生が教えてくれたのは、私の博士論文の審査報告を伊藤先生が教授会で読み上げるのが大変そうだった、ということで、ただただ頭が下がる思いでした。

2007 年ごろに科学哲学科学史研究室でソフトボール大会に出場したときは、球が荒れる学生が変わって伊藤先生がリリースされ、伊藤先生の打たせて取るピッチングで科哲史研究室は見事に試合に勝利し、学生が伊藤先生のピッチングを次の年も頼りにしていたのを思い出します。私が北海道大学に異動したあとにも松王政浩さんとの昼食会や忘年会に誘っていただいて、気にかけていただきました。松王さんとのバード

ウォッチングの様子を楽しそうにお話ししてくださいました。

科学哲学科学史研究室で学生が卒業論文や修士論文を執筆し、卒業するときには、内井先生と伊藤先生が、研究室を「追い出される」学生にそれぞれプレゼントをくださるのが慣習でした。伊藤先生は、毎年、学士と修士でそれぞれ大きさの違う木の動物をくださっており、学生の間では、博士論文を書いたら、もっと大きな木の動物がもらえるのじゃないか、などと呑気なことを言っていたのですが、内井先生と伊藤先生は、博士論文にもなったら、こちらが何かもらう番だ、とおっしゃっていたのを思い出します。しかし、伊藤先生は、ご自身が闘病されていた2020年12月に同年9月に生まれた私の娘にまで、動物の木のおもちゃをプレゼントしてくださり、改めて伊藤先生に自分が何かを返せたのか、と考えると忸怩たる思いです。伊藤先生のように温かい眼差しで、自分の娘や下の世代へと何らかの形で返していければ、と思っています。伊藤先生、いままでどうもありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

参考文献

伊藤和行 編, 佐野勝彦・杉本舞 訳・解説. 2014年. 『コンピュータ理論の起源 [第一巻]』近代科学社.